



『唐物凡数』(同志社大学総合情報センター所蔵) :  
孤本名物記 : その解題と翻刻

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 山田 哲也   |
| 雑誌名 | 文化情報学   |
| 巻   | 4   |
| 号   | 1   |
| ページ | 21-37   |
| 発行年 | 2009-03-20  |
| 権利  | 同志社大学文化情報学会   |
| URL | <a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012256">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000012256</a> |

『唐物凡数』（からものおよそのかず）（同志社大学総合情報センター所蔵）——孤本名物記——その解題と翻刻

山田 哲也

『唐物凡数』は、戦前に『仙茶集』の一部として松山吟松庵により、『茶道（全集）』巻の十二文献篇に翻刻されたが、その後研究の対象とはなりにくいものであった。それは本書がこの翻刻のみで、その底本の存在は否として知れず、また冒頭の「仙茶集」が茶湯名物道具名を羅列したもので、所蔵者の記述もほとんど無く、研究対象としては使いにくいものであったことによる。しかしながら、竹内順一・田中秀隆・矢野環氏の『茶道学大系』十（平成十三年、淡交社）、所収「名物記の生成構造」により、「仙茶集」の正体の一部が明らかになり、にわかになら注目され出したものである。喜ばしいことにこの『仙茶集』が二〇〇八年度新たに同志社大学総合情報センターに所蔵されることになった。『仙茶集』（文禄二年）は、『仙茶集七部書』と題したほうが適切な書物で、冒頭に天文年間末頃の茶湯名物記「清玩名物記」を省略・転写した「仙茶集」を置き、以下五部の茶書群と本書「唐物凡数」からなる。ここに翻刻する「唐物凡数」は、その末尾に付された永祿から天正年間にかけての地域別茶湯名物記である。戦前の松山吟松庵の翻刻は片仮名を漢字にするなど恣意的な変更が随所に見られ、また誤読も多く現在の研究には耐えられないものである。そこで今回新たに翻刻を提供することとした。

## 解題

戦前の茶道研究史において、創元社版『茶道（全集）』の意義は大きい物があった。様々な茶書の解題が纏まって与えられ、かなりの翻刻も提供された。しかし、その解題から重要な書であると思われ

ながら、第二次世界大戦を経て見いだせなくなった茶書も多い。これは本誌通巻二号所収の矢野環教授の資料紹介『志野殿被仰聞書』の解題の冒頭部分である。本書「唐物凡数」もそのような一本であり、管見の限り孤本である。

本書は、宗魯筆『仙茶集』の六十三丁のうち、三十四丁表から起筆され、

六十三丁裏の奥書部分に至る三十四丁を数える。その法量は二十五・四×十八・八cm。なお料紙は近代の謄写用紙かとも思われるが、これについては、今後も検討をしていきたい。

『茶道（全集）』巻の十二文献篇（昭和十一年 創元社）の九十八頁から百八十四頁にわたって「仙茶集」の註解（三頁）と本文が収められている。そのうち本書「唐物凡数」についてはその註解に次の様に紹介されている（通用の漢字に改める）。

一 第六篇の「唐物凡その数」は、其の奥書に「日本国中宝物所持の高下の人体之を記す」といへる如く、斯くばかり広汎に渡りて細大洩さず書留めし名物記は他に其の比類なし。茶書研究家にとりては、真に座右の宝典たるべき貴重文献なり。

注解者米太郎松山吟松庵（以下吟松庵とする）は本書をこのように位置づけているが、前述したような理由により長く研究対象とされることはなかった。そもそも奥書にその名を留める「宗魯」なる人物自体、現在でもどのような人物か不明なのである。『仙茶集』自体は、「山上宗二著の『茶器名物集』と並ぶ安土・桃山時代の代表的な名物記」という評価は得ていた「一」ものの、その後後に成立した他の名物記と関連させた研究など皆無に等しく、孤立した存在であった。

さて本書は堺にはじまり、（上）京、下京、奈良、大坂、平野、摂州、尼崎、越前、尾州、近江、美濃、阿波、豊後、博多、山口、駿河、平戸、対馬まで十九カ所の地域にまたがり、百六十三名の茶人と、その所蔵名物茶道具四百二十二点を列挙し、また本文中に「一、カイサンノゴトク信長へ出レ之」というように移動情報が書き込まれている点、重要なものである。さらに道具の名称でも、「肩衝（かたつき）」を「カタツキ・

「ガタツキ」、「茶杓（ちやしやく）」を「さしやく」・「ちやしやく」としているように一定していない。「肩衝」を「ガタツキ」と表記する例は本書以外江戸初期の名物記に散見し、「茶杓」を「さしやく」・「ちやしやく」と併記する例は、戦国から安土・桃山期に成立した茶書にはまに見られるので、これは、本書成立期における茶の湯の世界の実態を示しているものと言えよう。これら所載情報は、概ね永禄年間から天正年間のもので考えられるが、本書の成立時期については更に絞り込みが可能であろうと思われる。「二」

また前述した、吟松庵の翻刻の実態を例示してみると、以下のようになる。

吟松庵翻刻

本翻刻

堺 今井宗久 堺 今井宗久

一 天目 灰被 一数の台 一 天目ハイカヅキ

一 朝山 圓絵 馬麒筆 一 数ノ台

一 朝山マルエ 馬麒筆

（漢字は通用の字体に改めた）

これは冒頭の一部であるが、吟松庵の翻刻では本来「ハイカヅキ」・「マルエ」と片仮名で表記してある箇所を、「灰被」・「圓絵」というように恣意的に漢字に改めたり、「ノ」字を欠落させていることや、「数ノ台」の箇所も同様な問題をふくみながら、天目と並列して表記されているのに、天目の後に置かれるなど、文字の配置まで原文とは大きな違いを見せている。また振り仮名については全く無視している。このような吟松庵翻刻の不備は随所にみられ、現在の研究資料としては使用に耐えられ

ないものである。繰り返しとなるが、今回再翻刻を提供する最大の理由はここにある。

次に本書を収める『仙茶集』の旧所蔵者阿部房次郎についてふれておきたい。『仙茶集』本文第一丁目右下隅に、「爽籟館珍蔵印」という印が押されている。これは阿部房次郎の所蔵印である。阿部房次郎（一八六八～一九三七）は、もと東洋紡績社長で、有数の中国書画コレクターとして知られ、彼のコレクション一六〇点は、その没後昭和十七年大阪市立美術館に寄贈され、同美術館の所蔵品の柱となっている。なかでも「伝王維筆伏生授経図」・「宮素然筆明妃出塞図」・「蘇軾筆李白仙詩書四卷」などの作品はよく知られているものである。〔三二〕

この阿部房次郎旧蔵書は東北帝国大学法文学部東洋美術研究室において写真撮影が行なわれ、写真帖が作成された「四」。現在その写真帖は、筆者の勤務する今日庵文庫に架蔵されている。この写真帖は、大正から昭和の数寄者益田鈍翁（一八四八～一九三八）の入手するところとなり、ちようど刊行間近であった『茶道（全集）』の執筆者の一人であった、吟松庵に貸出されている。この鈍翁所蔵の写真帖の内容は吟松庵をいたく刺激したようで、それは所蔵者鈍翁の許可を得ることもなく吟松庵が書写していることから窺える。写真帖にはその間の事情を物語る鈍翁宛の吟松庵書簡が貼付されており、『茶道（全集）』刊行前夜のエピソードとして以下に紹介してみたい。

吟松庵の差出日付は「八月十日未明時」。巻の十二の刊行が昭和十一年十一月であることと、他の執筆者への原稿依頼の時期を勘案すると、この八月十日とは、十一年の八月の可能性が高いと思われる。

拝啓御大事の御本、未た」御熟覧とも及ハさる先二、我ら二」見せ

候んとて、ワさく御送りこし」賜ハリ候。御情の程難有忝く、

誠二貴翁ならてハと、いと、」感激やみ難く覚え候。先便申上候如く、一冊ハ小生無二の友たりし、」松岡恒太郎の旧蔵本にて、昔日小生の借受、久しく手許ニ留め置」けひつるものにて、既ニ小生の写しも」所持有之、今更故人の顔を見」る心地して、むかしを思出て涙」を流し候。今一冊の宗魯筆仙茶」集にハ荒木道薫の茶会記の留書なども有之、前後の諸国名物道具の」扣なども、中々面白き事有之候。御許しを願ハさる先二如何とハ存」候へとも、昨今二日にて仙茶集」全部写取り、只今午前三時」此文を認居申候。写し行く」内、心付き候誤、あらく共、処々に」挿し紙して記し置申候。御覧」の際、幾分にて御参考ニ成り」候ハ、、それぞ少しの御礼心と、」思召被下度候。さすか写し終へ、気かゆるみ、」フラくと申候ま、にて、」御免を蒙り可申候。 草々

松山米太郎

八月三日未明時

鈍翁老大人

尚々明日御本御返送可仕候

（句読点は筆者、」は改行を示す。漢字は通用の字体に改めた。）ここからは、鈍翁の所持する『仙茶集』の写真帖の豊富な内容に、貪欲にならざるを得なかった吟松庵の姿が見て取れよう。わずか二日で写真帖の内容を写取り、なおかつ訂正までしているのである。そしてこの書簡が出されて三ヵ月後の昭和十一年十一月、『茶道（全集）』巻の十二文献篇は刊行された。

なお本書の内容、その他についての詳しい検討は後考を俟ちたい。

〔本文翻刻〕

〔一〕『角川茶道大辞典』七五六頁、該当項目 平成二年 角川書店

〔二〕矢野環教授は、元亀年間に編纂されたとする。『名物記』の生命誌

七永祿・元亀の名物記一 『茶の湯』第三七五号所収 平成十七年

五月 茶の湯同好会

〔三〕『大阪市立美術館蔵品選集』八〇九頁「蔵品紹介―各コレクション

の内容と背景」昭和六十一年 大阪市立美術館

〔四〕『宗魯筆 仙茶集 百二十七葉』

〔仙茶集奥書部分〕

右一本者<sup>子</sup>於南泉堺土染禿筆<sup>矣</sup>于時

文祿第二癸巳曆花朝日 宗魯（印） 33オ

.....

〔半丁空白〕

..... 33ウ

凡例

一、各条一つ書きとなっており、便宜のため「一、」の形をとった。

二、底本は漢字・平仮名・片仮名混じり文である。漢字は通行字体を用いて翻刻した。振り仮名、濁点は底本にあるものをそのまま記した。

誤字については、その初出の横にパーレンを付して正字を注記した。

三、全体で四百二十二箇条である。箇条には通し番号を付した。

四、丁変わりを、「（丁数）（オ・ウ）」の形式で与える。

五、堺衆の所持情報部分である四八丁が錯簡を起こしており、それを訂

正し、本来の位置に戻した。しかしながら錯簡の状況を明瞭にするた

め、丁数の整合は行わなかった。ただし箇条の通し番号は適正なものに直した。

唐物凡数<sup>からものをよそのかず</sup>

堺<sup>さかひ</sup>

今井宗久<sup>いまゐそうきう</sup>

1 一、天目ハイカヅキ<sup>てんもく</sup>

2 二、数ノ台<sup>かずのたい</sup>

3 一、朝山マルエ<sup>あさやま</sup>

4 一、浪ノ絵<sup>なみのゑ</sup>

5 一、虚堂ノ文字<sup>きょだうもんじ</sup>

6 一、子昂<sup>スカウカ</sup> 帰去来之文字<sup>キコライのもの</sup>宗瓦<sup>そんがわ</sup>ヨリ出<sup>いたす</sup>レ之<sup>これを</sup>

馬麟筆<sup>ばりんふで</sup>

玉礪筆<sup>ぎよくらんふで</sup>

- 7一、ゾロリノ花入はないれ ─ 34オ
- 8一、米元章ノ硯べいげんしやうが すゝり
- 9一、高麗茶碗こうらいぢやはん
- 10一、ウチ赤ノ盆数之内あかのぼんかずのうち
- 11一、竹茶杓たけざしやく 周徳作しゆとくがさく
- 12一、象牙ノ茶杓ざうげのちやしやく 同作信長へ出レ之おなじくのぶながへいだし これを
- 13一、イモガシラ水サシ土ノ物いもがしらみづさしつちのもの
- 14一、シメキリ水サシしみきりみづさし
- 15一、ボウノサキノ水コボシぼうのさきのみづこぼし
- 16一、カイサンノゴトク 信長へ出レ之のぶなが いだし これを ─ 34ウ
- 17一、手ドウロウノカゴ花入て どうろうのかがはないれ
- 18一、石菖バチせきしやう 周光しゆくわう
- 19一、鍋釣物なべづりもの
- 20一、リンテツノジャウハリ
- 21一、ジャウハリ 宗瓦ニ有レ之そうわは あり これ
- 22一、文琳ぶんりん 天王寺ヤ宗及てんわうじ そうきやう コツボ
- 23一、天目ハヒカヅキ
- 24一、数之台かずのだい
- 25一、フワノカウロ
- 26一、舟子せんす 牧溪筆もつけいふで ─ 35オ
- 27一、平釜ひらがま
- 28一、夕陽之田絵せきやうのまるゑ 馬麟筆ばりんがふで
- 29一、ヒツキリノ水サシ

- 30一、ツバメグチノ柄杓サシつばめぐちのへしやく
- 31一、ガウシ
- 32一、駄路ノ鈴ノフタ置駄ろのすずのふた置き
- 33一、篠茶碗せうぢやわん
- 34一、布袋ノ香箱ぶたいのかうばこ
- 35一、鬼桶 シカラキ 佐久間殿へ出レ之さくまどの いだし これ ─ 35ウ
- 36一、カブラナシ 三田宗春みつだそうしゆん
- 37一、バントウノ茶入ばんとうのちやいれ
- 38一、ムシノ絵むしのゑ
- 39一、コンネイデンノ茶碗こんねいでんのちやわん 今ハナラヤ道滴所持いまはならやみちたつしよぢ
- 40一、シガラキノ水サシしガラキノみづさし
- 41一、裏赤ノ盆うらあかのぼん 数之内かずのうち
- 42一、芍薬ノ絵しやくやくのゑ 今井宗助いまゐそうじよ
- 43一、ツ、
- 44一、カメノフタ サツマヤ宗金さつまやそうきん ─ 48オ
- 45一、菓子ノ絵七種かしゐしちゆ 趙昌筆 信長へ進上てうしやウカ のぶなが しんじやう
- 46一、石菖バチ
- 47一、天目ハヒカヅキ
- 48一、ウチ赤ノ盆あかのぼん 今井宗本いまゐそうほん 数之内かずのうち
- 49一、カイ尽シ絵かいじんしゑ 趙昌筆てうしやうふで

50一、ヒラ田ブネ

アボシヤ道林

51一、周光茶碗

これは  
是ハ博多へ下候豊州  
小田部殿所持

52一、フカイゾクノ文字

ハガネ屋道ハン

53一、ヒスぬノ絵

54一、ツダ天目

55一、ツ、

天王寺屋道叱

56一、月ノ絵

玉礪筆

57一、ニホガタツキ

58一、天目

天王寺屋了雲

59一、クワテキノ船

宗円

60一、玉ガキ文琳

宗円

61一、岸ノ絵

62一、虚堂ノ文字

63一、枯木

64一、セガイ船

木工宗印

65一、石菖鉢

66一、天目 二ツ

紅屋宗陽

67一、カタツキ

68一、同博多ガタツキ

69一、天目

70一、虚堂之文字

茜屋宗佐

71一、ツルクビ

72一、花ノ絵

若狭屋宗桂

73一、天目タフカタビラ

74一、フヨウノ絵

博多屋宗受

75一、虚堂文字

76一、ジヤウハリ

油屋常由

77一、紹滴ガタツキ

78一、数之台

79一、鶉之絵

80一、ヒラガマ

81一、エフゴノ水サシ

82一、天目

83一、芙蓉之絵

┌ 36ウ

┌ 37オ

┌ 37ウ

- 84 一、数ノ外ノカブラナシ
- 85 一、ヤツレガウシ  
コシマ屋道察
- 86 一、客来一味  
牧溪筆
- 87 一、シメキリ
- (日比)  
比クヤ了桂
- 88 一、フヂコブ  
五トク
- 89 一、入道ゲモ  
釣物
- 塩ヤ宗悦
- 90 一、シノマルツボ
- 91 一、松山之石  
玉礪筆
- 92 一、水仙花絵
- 93 一、シガラキ  
大ツボ
- 94 一、シメキリ
- 95 一、水口ノガウシ  
尼崎屋宗好
- 96 一、カタツキ  
同舎弟
- 97 一、小野ガタツキ  
木屋宗劬
- 98 一、ツバメノ絵  
牧溪筆
- 99 一、ヒラガマ  
小西了以

┌ 38ウ

┌ 38オ

- 100 一、クワンヨウノ茶碗  
高三藤兵衛尉
- 101 一、同茶碗  
ハリマヤ道順
- 102 一、驢蹄ノ小ツボ
- 103 一、ヒラガマ
- 104 一、天目  
アカネヤ宗察
- 105 一、カブラナシ  
数之内今ハ荒木所持之
- 106 一、キノヘカタツキ
- 107 一、周光茶碗  
信長へ出レ之
- 108 一、ツルツキ  
牧溪筆
- 109 一、チ、ミ庭鳥  
富嶋佐渡
- 110 一、寺木ガタツキ
- 111 一、天目ハヒカツキ  
万代屋
- 112 一、ナゲツキン
- 113 一、真之茶碗
- 114 一、ツ、  
数之内  
周徳作
- 115 一、竹茶杓
- 116 一、七い高香炉
- 117 一、九重之大ツボ
- 118 一、周光茶碗

┌ 39オ

┌ 39ウ



119 一、スミトリ  
カサハリ宗忻  
「 40 オ

120 一、カタツキ  
等印  
張成造

121 一、筆  
浄慶  
張成造

122 一、クワンヨウノ茶碗  
コシマヤ正清

123 一、カキコツボ  
124 一、天目  
ナラヤ道滴

125 一、円座ガタツキ  
126 一、茶碗  
住吉屋宗無

127 一、セイタカガタツキ  
128 一、数之茶碗  
信長へ進上  
信長へ進上  
信長へ進上

129 一、雁之絵  
ヂウノ宗甫  
玉礪筆  
信長へ進上

130 一、ハンドウノ茶入  
131 一、千草ノ大ツボ  
132 一、虚堂之文字  
133 一、石菖バチ  
134 一、釣物

千 宗易  
ゼンコ  
「 41 オ

135 一、香炉  
136 一、鶴之一声  
137 一、ハシタテ

クサベヤ道設

138 一、カタツキ  
松原紹通

139 一、印月江之文字  
藪之内宗以

140 一、鶉之絵  
目口意足

141 一、ツルクビ  
142 一、深山  
143 一、ウチ赤ノ盆  
144 一、天目  
145 一、ナマズ  
146 一、ジャウハリ  
大ツボ  
大ツボ  
大ツボ  
数之内  
花瓶

147 一、ハンドウ  
薬師院  
「 42 オ

148 一、天目  
149 一、ハリヤガタツキ  
150 一、カハズノ硯  
松江隆仙

151 一、キヌタノ  
152 一、鏡仏初之文字  
仏ノ字ハアヤマリ物字也

153 一、稲ノ絵  
キヌヤ宗智

月山筆

シウサイ

「42ウ

154 一、ヤセ馬

リアンチウ筆

正通

155 一、腹サスリ布袋

牧溪筆

156 一、翁之天目

157 一、アマガ崎台

道珍お為

158 一、松花

大ツボ

同円真

159 一、虚堂之文字

160 一、カウチウ茶碗

セウサイ道甫

161 一、ツ、数之内

石川宗二

162 一、小デク月ノ絵  
今田屋所持レ之

163 一、玉虫

大ツボ

臼井

164 一、メグロダルマ

牧溪筆

石津屋

信長ヨリ道三へ  
被レ進之

165 一、雀之絵

馬麟筆

コシマヤ紹通

「43ウ

166 一、カキベラノカタツキ

167 一、リウゴノ花入

石橋

168 一、クシザシノ雀

牧溪筆

169 一、ツルベノ水サシ

170 一、タンス

171 一、イザヨヒノ船

172 一、ワリ竹ノ硯

武野新五郎

173 一、蓬心斎硯

174 一、高麗茶碗

175 一、ジャウハリ

住吉屋道以

176 一、天目

正月屋了左

177 一、圓悟之文字

ケンチウ

178 一、高麗茶碗

竹蔵屋紹適

179 一、松風

大壺

180 一、シユミノツリ物  
今錢屋所持レ之

181 一、真ツボノワタシ

182 一、レウドウゲキシユノ水ツギ

満田

「44ウ

「44オ

- 183 一、漁村夕照 ギヨソノセキセウ
- 184 一、ハヒカヅキ カキヤ
- 185 一、トラサルノ大ツボ おほ 今荒木所持之 いまあらかしよち これを
- 186 一、タイコノ茶入 ちやいれ 天王寺屋宗閑 てんわうじやそうかん
- 187 一、ホソグチ
- 188 一、スバリ アワヂヤ宗以 そうい
- 189 一、蘭之絵 ランのゑ 玉礪筆 ぎよくかんみで
- 190 一、船 ふね
- 191 一、セミノ硯 すより 革屋長善 かはやちやうぜん
- 192 一、蘭ノ絵 ランのゑ 玉礪筆 ぎよくかんみで
- 193 一、天目 てんもく 浄慶 じやうけい
- 194 一、サルミ、ノ 小口
- 195 一、ナデシコノ大ツボ おほ 小西宗滴 こにしやうてき 紹左 せうさ
- 196 一、るいザノ茶入 ちやいれ

- 197 一、ヨウヘン
- 198 一、小ヲモテノ台 こ 石橋ゴマヤ いしばし
- 199 一、豊後天目 ぶんごてんもく
- 200 一、アマガ崎台 あまがさきだい
- 201 一、ハヒ足之水ツギ あしのみづ 四条ゴンカク しやうじやう
- 202 一、蝸牛ノハシラ花瓶 クワギウ 中町ハチャ なかのちやう
- 203 一、ツノハナ入 いれ 伊勢屋源入 いせやげんにふ
- 204 一、タツラノ絵 ゑ 月山筆 げつさんみで
- 205 一、シモ茶碗 ちやわん 長青 ちやうせい
- 206 一、筒数之内 つゝかずのうち 住吉屋宗空 すみやしやそうくう
- 207 一、真之カマ まの
- 208 一、大海 だいかい 是ハ博多へ下候 こゝろはかたくだり 京ノ道三 きやうだうさん
- 209 一、ウヅラノ 大ツボ
- 210 一、フジナスビ
- 211 一、天モクタデビヤシル てん 針屋紹珍 はりやせうちん



240 一、紹珍茄子

嗟峨ノスミノクラ

― 50 ウ

241 一、ヒシノカウ箱

烏丸

242 一、香炉

243 一、布袋 香箱

244 一、無準ノ文字

奈良松永霜台

245 一、円座茄子

246 一、マンザイ大海

247 一、数ノ台 二ツ

248 一、初雁 大ツボ

249 一、エフゴ

250 一、合子

251 一、松ノカタツキ

252 一、松本 天目

253 一、アサ日ノテンモク

254 一、ヒラグモノカマ

255 一、コトウノ筒 花入

三蔵院

256 一、肩衝

257 一、伊勢ガマ

258 一、玉ノコシ水サシ

259 一、夕陽ノ天目

260 一、柄杓サシ コトウ

261 一、独鶴之絵

牧溪筆

262 一、フテス、ギノフタヲキ

263 一、カウレウノ台

同清如

264 一、大軸之絵

ハチャ紹左

265 一、四十石 大ツボ

266 一、ジャウハリ

ヌシヤ弥三郎

267 一、肩衝

268 一、シヨキノサギノ絵

269 一、三花ノ梅

清順

270 一、天目

271 一、天目ハヒカヅキ

大乗院

272 一、天目

うつぼヤ受庭

273 一、田馬之絵

274 一、コブツボ

275 一、周光ノイモガシラ

キヌヤノ宗林

牧溪筆

羽柴殿へ出レ之

― 52 オ

― 52 ウ

- 276 一、コシヨウノ瀬戸香炉セトがうる  
 277 一、無準ノ文字アンジュン  
 278 一、ネプトガウロ  
 北ノハシ宗連きた ぞうれん  
 279 一、天目てんもく  
 280 一、ヒラガマ  
 大坂分おほさかのぶん  
 本願寺ほんくわんじ  
 281 一、残雪之石ザンセツノいし  
 282 一、ギョクタクウガタツキ  
 283 一、サコシさくし  
 レウカイ筆れうかいふで  
 284 一、白天目しろてんもく  
 丹後守たんごのかみ  
 信長へ出レ之のぶなが いなす これを  
 285 一、ヒツキリ水サシみつ  
 286 一、ホテイブカンノエ  
 法橋ほつけう  
 信長へ出レ之のぶなが いなす これを  
 (編)  
 287 一、小玉硯こたまよくかん  
 信長へ出レ之のぶなが いなす これを  
 288 一、茄子なすび  
 289 一、ニツ銘之ザウケノ茶杓めい さしやく  
 信長へ出レ之のぶなが いなす これを  
 290 一、ケイコンノ天目てんもく  
 木村屋道恵このむらやだうゑ  
 291 一、文字ヤガタツキもんじ  
 292 一、紹鷗ノモ、ジリせうおう  
 293 一、水谷みすたに 大海だいかい  
 菊屋樵斎きくやせうさい

「 53 ウ

「 53 オ

- 294 一、ハナノ絵あな  
 塩ヤ等安しほ とうあん  
 趙昌筆てうしやうめい  
 295 一、ツホネカサネノカウロ  
 296 一、カスミノスミトリ  
 297 一、サユノ瀬戸茶碗せとぢやわん  
 コマイ  
 298 一、サホヒメノ大ツボ  
 福嶋屋ふくしまや  
 299 一、羽淵ノ竹茶杓ハフチ たけさしやく  
 300 一、アマガ崎台あまがさきだい  
 山田屋宗珍やまだやぞうちん  
 301 一、はねぶちのさしやく  
 薬ヤ了喜くすり れうき  
 302 一、フカイゾクノ文字もんじ  
 原田常德はらだじやうとく  
 303 一、円座ガタツキえんざ  
 304 一、カニノフタヲキかうづけ  
 上野うの  
 305 一、白雲之大ツボはくうんの おほ  
 筑後ちくご  
 信長へ出レ之のぶなが いなす これを  
 306 一、真ノツボ  
 平野分清可ひらの、ぶんせい か  
 307 一、肩衝かたつき  
 308 一、雀ノ絵すずめ  
 牧溪筆もつげいふで

「 54 ウ

「 55 オ

清順 せいじゆん  
数ノ内 かずのうち

309 一、桃尻 ももぢり

勘解由 かげゆ

310 一、菖蒲 しやうぶ

同了信 おなじくろうしん

子庭筆 しんていふで

311 一、火箸 ひぼし

正覚寺 しやうかくじ

数之内 かずのうち

312 一、桃尻 ももぢり

仲斎 ちゆうさい

数之内 かずのうち

313 一、ヒメゴセノ大ツボ おほきゆうひやうおほぜう

久兵衛尉 きゆうべいゑう

314 一、クワンヨウノ茶椀 ちやわん

播州之分 ばんしゅうのぶん

スミヤ休把 すみやきうは

315 一、スミトリ

数之内 かずのうち

316 一、青磁 せいじ

善海 ぜんかい

茶碗 ちやわん

317 一、鶏之絵 にほとりのゑ

尼崎 あまがさき

318 一、カキノコツボ

越前之分 えちぜんのぶん

319 一、ダルマガタツキ

320 一、ケイコンノカタツキ

321 一、コガラシノカタツキ

府中青木 ふちうあをき

322 一、式部丞肩衝 しきぶせうがたつき

323 一、トウキレ肩衝 がたつき

平生寺 へいせいじ

324 一、筒数之内 つくだずのうち

府中ミソヤ ふちう

牧溪筆 もつげいふで

325 一、大軸ノ絵 おほちくゑ

326 一、二王ノ大ツボ にわうのおほ

327 一、残月之カタツキ ざんげつ

主シラズ ヌシ

328 一、芥子ノ絵 けしゑ

329 一、鳳仙花ノ絵 ほうせんかうゑ

330 一、カイヅクシ

331 一、十徳ノ水サシ

332 一、宗五之カキウチワ台 だい

尾州信長 びしゅうのぶなが

333 一、ツクモ

334 一、松本茄子 まつもとなすび 是ハ紹陽茄子也 これせうおうなすび

335 一、フシナスビ ふしなすび 京薬師道三参候 きやうやくしのだうさんまいり

336 一、松嶋 まつしま

337 一、小松嶋 こまつしま

338 一、菓子ノ絵 かしゑ 五種趙昌筆 しゆてうしやうふで 同七種も おなじくしゆも

339 一、天目ハヒカヅキ てんもく 此内タテビヤシル このうちたてびやシル ニツ

くすし道三へまいり

┌ 56オ

┌ 55ウ

┌ 56ウ

┌ 57オ

┌ 57ウ

- 340 一、アサミ天目 一ツ  
 341 一、晩鐘ノ絵 玉礪筆  
 342 一、万里高山ノ絵 同筆  
 343 一、周徳ノ竹茶杓 宗善茶杓といふ也  
 344 一、カブラナシ 花入  
 345 一、藤ナミノヒラガマ  
 346 一、ホヤ香炉  
 347 一、ヒラデガウシ  
 348 一、柄杓サシ  
 349 一、高麗茶碗  
 350 一、虚堂文字 イクシマ殿  
 351 一、田口釜  
 352 一、竹ノコノ花入  
 353 一、大軸ノ絵 牧溪筆  
 354 一、引切之ガウシ  
 (進)  
 近藤  
 355 一、ウトウコツボ 美濃

「 58 オ

「 58 ウ

- 359 一、ハシタカノ大ツボ  
 360 一、ヨナカノ花入 青磁  
 阿波分  
 361 一、小茄子 奈良ソソケウゐン小ナスビト云也  
 362 一、三ヶ月 大ツボ  
 363 一、周光茶碗  
 364 一、茅ノ竹茶杓 周徳作  
 365 一、クルミノ柄杓 サシ  
 366 一、カヘリ花ノ水サシ  
 367 一、曜変ノ天目  
 368 一、カウレウノ台  
 369 一、カイゲノ水サシ  
 370 一、ウチ赤ノ盆  
 371 一、虚堂ノ文字  
 372 一、大灯ノ文字 アタキ  
 373 一、松本茶碗  
 374 一、シメキリ  
 375 一、ウチシロノ天目 豊後御屋形宗麟  
 376 一、新田肩衝  
 377 一、天目ハヒカヅキ  
 378 一、建盞  
 379 一、青楓 油滴 玉礪筆

「 59 オ

「 59 ウ



白杵鑑澄

380 一、へウタン

381 一、鳩ノエ

(楊)

382 一、陽貴妃之茶碗

383 一、漁父

仲屋宗意

384 一、肩衝

385 一、フネ

同舎弟

386 一、アスカヒガタツキ

仲屋宗悦

387 一、市ノ絵

388 一、驢蹄之小ツボ

389 一、天目

(毛利)

森

390 一、山下天目

391 一、有明ガタツキ

392 一、キソウノサギ両フク

白杵紹冊

393 一、鶉ノエ

博多分 嶋井宗叱

394 一、夜雨ノエ

玉礪筆

「キソウノ筆」60オ

牧溪筆

玉礪筆

「60ウ

395 一、老茄子

396 一、天目ハヒカツキ

397 一、アマガサキ台

川原紹悦

398 一、似茄子

今石紹安

399 一、漁父

牧谿筆

400 一、テン目

401 一、尼崎台

神屋宗滴

402 一、文琳

403 一、合子

404 一、カスミノ台

405 一、ヲモカゲノ大ツボ

406 一、ナラシバガタツキ

407 一、桃尻

博多之内高之人御持候

408 一、鏡物初之文字

409 一、虚堂文字二フク

410 一、印月江一フク

412 一、大恵ノ文字一フク

「61オ

「61ウ

「62オ

宗浦御取候

413 一、茂古林文字 二フク

414 一、ヨクリヤウアン 三ブク

415 一、タイキン文字 嶋井宗叱

416 一、周光茶碗 小田部宗雲

山口大子屋宗冊

417 一、周徳茶杓しゆとくさしやくアラミ藤四郎ふじやうツハノ吉見殿よしみどのニ有レ之

駿河するが 418 一、漢カネガウシ 「62ウ

419 一、常子ナスビ

平戸肥州ひらどひしう

420 一、小軸ノ絵 晩鐘 牧溪筆

421 一、真ノツボ 対馬立石右衛門大夫

422 一、天神 肩衝

日本国中宝物所持之高下ノ仁体  
記レ之

右一本者於南泉堺地染禿筆 宗魯(印)

「63ウ